

大戦間期の英国伝記文学における人種と性の境界	
松永 典子	比較社会文化学専攻
期間	2006年2月10日～2月24日
場所	英国 ロンドン、エジンバラ
施設	大英図書館、大英図書館分館新聞資料室、英国国立海事博物館、エジンバラ大学附属図書館

### 内容報告

現在、報告者は、「大戦間期における英国伝記文学」（仮題）と題する博士号学位申請論文を執筆中で、その提出を目指して論文執筆および学会発表等をおこなっている。本調査も、学位論文の一部となる「大戦間期の英国伝記文学における人種と性の境界」研究の完成に必要な資料を収集するために、報告者単独によって計画および実行された。本報告書は、その調査結果をまとめたものである。

最初に学位申請論文としての本調査の位置づけを説明した後に、調査の目的、調査機関の選出、調査の実際、調査の成果を順次明らかにする。最後に今回の調査を踏まえて、今後の展望と取り組むべき課題を述べる。

#### 1. 調査の位置づけ

学位論文執筆の一環としておこなわれた本調査の位置づけを明確にするために、まず博士論文の概略を述べる。

英文学を専門領域とする報告者は、過去においても・現在においても戦争という事象に文学が関与することに興味をもち、歴史主義のアプローチから戦争文学を題材に、第一次大戦以後・第二次大戦開戦までの大戦間期における英国の〈市民〉および〈国民〉像の確立について研究をこれまで進めている。とくに当時文学者および作家だけでなく、戦争回想録という形で政治家および軍人にも、流行した伝記文学を研究対象としている。

学位論文では、戦争をはじめとする暴力の連鎖を批判的に考察するために、人種と性を分析軸に大

戦間期の英国の伝記文学を考察する予定である。そのときの主要テキストとして伝記文学を扱うところに、学位論文の最大の特徴がある。大戦間期の英国文学はいわゆるモダニズムと呼ばれる時代にあたり、これまでの研究においては韻文や散文もしくは技術革新によって発展した視覚芸術に議論が集中してきた。しかし、その一方で当時の作家たちの伝記に関する関心が高かったという事実は見過ごされているようだ。たしかに英文学史上、伝記文学が盛んであったのは、十九世紀のヴィクトリア時代であり、事実、この時代には数多くの伝記が出版されている。その集大成ともいえる『英国人名辞典』が1882年に刊行が開始されているように、ヴィクトリア朝の伝記作品は枚挙にいとまがない。しかし伝記の概念そのものを見直しの必要を唱える報告者の関心は、ヴィクトリア時代の伝記でもなく、モダニズム時代の小説や詩でもなく、英文学研究史上の重要性が指摘されているにも関わらず十分な研究がなされていない大戦間期の伝記にある。

そして大戦間期の伝記文学を論じるさいに有用と思われる分析軸が、性および人種である。モダニズム文学期にあたる戦間期は、性科学の議論が盛んであった。性科学は既に1870年代には英米両国・ヨーロッパにおいて議論されていたが、言葉そのものが造られたのは20世紀初頭だという事実が示唆するように、大戦間期は性科学にとって新たな局面を迎えた時代であった。性科学と伝記の両者の関係の深さを示す例として、性科学の創始者ハヴェロック・エリスの「天才」に関する考察が挙げられる。この

考察において彼は『英国伝記事典』を一次資料として用いているが、彼にとってだけでなく当時の伝記研究者にとっての伝記(bio-graphy)とは、生物の学問すなわち生物学(bi-logy)であり、性科学や優生学の議論とも通底していたと考えられる。このように伝記分析に性科学の観点を導入することは、同時に伝記に性だけでなくさらには人種という属性をおびた身体分析が可能にするのである。

人種・性という属性をおびた身体が伝記として戦後に描かれるとき、それは国家の身体すなわち「市民」および「国民」の姿として表される。戦争をもたらした大量殺戮は、作家（伝記作家）に戦死者という新たな対象（伝記モデル）を提供したのである。そして戦争という国家行事という俎上にのった伝記対象を前にした伝記作家が描くのは、モダニスト作家が主張したような「個性」ではなく、「帝国の臣民の死体」という国家の身体であった。

以上のように学位論文では、身体・性・人種・戦争をキーワードに英国の戦間期という特定の地域、特定の時代の文脈の考察をとおして伝記概念そのものを問い直し、伝記に潜在する覇権的思想を明らかにすることを目的とする。そのさいに方法論として採用するのは、文学研究と歴史研究のアプローチである。ただし、後者を前者の証明もしくは根拠とするのでも、または歴史と文学のテキストとして区別するのでもなく、両者をともに歴史およびフィクションの世界を作るテキストとして読み解く。何故なら「帝国主義以後」の新たな「国家」としての英国の「市民」の解体および再構築の伝記物語を語ったのはそのいずれかではなく、両者だからである。

上述のようなテーマで学位論文を執筆中である報告者は、その一環として海外渡航の直前に口頭発表をおこなった。それが2005年11月6日(日)お茶の水女子大学21世紀COEプログラム第二回F-GENSシンポジウム「ポスト冷戦期のアジアとジェンダー研究」の一プログラムとして開催された「若手研究者企画セッション」分科会A「境界に挑戦する—ジェンダー、人種、階級、国家」にて、研究代表者としておこなった共同研究である。本渡航研究は、そのときのテーマをさらに発展させたものである。

このときのセッションの最大の特徴は、主に本学COE(F-GENS)に関係する若手研究者がジェンダー研究を多角的学際的に考察すると同時に、すべての企画および運営等の実務面を担ったことにある。事

実、報告者を含めた発表者全員が企画の準備段階から参加した。もう一つの特徴として、このときの分科会の参加者の専攻が人類学、社会学、文学、文化研究と多岐にわたり、同時に専門とする地域もフランス、エジプト、英国、英米両大陸、日本、韓国と幅広いものであったことが挙げられる。このような学際的アプローチを取るジェンダー研究者との複数回にわたってもたれた話し合いは、必然的に参加者間の活発な意見交流をもたらした。一連の議論に大いに刺激を受けた報告者は、「越境するオーランドー、帰還するオーランドー」と題した研究発表をおこなった。

すなわち、帝国臣民という主体の確立に伝記言語が如何に関与するのかを考察するために、言語的実験を追求したとされる英国モダニズム運動の代表的作家ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)の小説『オーランドー—伝記—』(1928)の両性具有の主人公の持つ性および人種の攪乱可能性を検討した。最初にオーランドーのアラブから大英帝国への帰還場面を、作品発表当時に社会問題となっていた湾港都市での「異人種」間の暴動事件と並置させ、作品発表当時の新聞等の歴史資料からオーランドーが帰路に出会った水夫を「黒人」とする解釈を提示した。そのうえで主人公はセクシュアリティ、ジェンダー、性に関しては攪乱的な存在であったが、人種という文脈においてみると結局は本作の語り手である伝記作家が主人公を英国白人という規範的語り手に収斂させてしまっているという論旨を展開させた。歴史分析と文学作品の精読というアプローチを並置させることによって、英国市民の範疇から「異人種」を排除する身体を温存させたモダニズムの覇権的思想を浮かびあがらせた。

上記の発表を学位論文の一部として発表するためには、さらに歴史資料の考証を充実させる必要がある。上記の発表のために報告者がリサーチをおこなったのは、主に日本国内に所蔵のある『タイムズ』をはじめとする主要紙だったが、発行部数の多い全国紙は当時の状況を俯瞰するには有効な媒体だが、地方に関する報道が比較的少ないという弱点がある。前述の暴動事件についても言及はあるものの、地方都市における特定業種間の事件であるためか継続報道も少なく、扱いが小さい。日本国内の各種図書館に蔵書のある20世紀初頭の刊行物の多くは、ロンドン発信の記事が中心であり、日本国内においては資

料収集の限界があった。そのため本調査を計画した。

## 2. 調査の目的

本調査の目的は、非在の人種の境界を実在させようとする「帝国」の企図を戦間期における英国に入国する移民たちの言説を歴史的資料から明らかにすることにあった。既に口頭発表のために国内において主要刊行物を収集していた報告者が、今回の調査対象としたのは主に国内に所蔵のない資料である。特に学位論文の分析対象となる大戦間期すなわち第一次大戦が開始した1914年から「オーランドー」出版の1928年にかけての刊行物および視覚資料を中心に、英国湾岸都市に実際に多発した「異人種」をめぐる言説を調査することとした。

## 3. 調査機関の選出

渡航にあたって複数の研究機関を検討した結果、オックスフォード大学ボードリアン図書館(Bodleian Library)およびロンドンの大英図書館(British Library)、エジンバラ大学付属図書館という著作権機能を有する図書館を候補に入れた。いずれも英国の国会図書館ともいうべき機関で、定期刊行物、書籍、マニュスクリプト、絵画、音声資料などの膨大な蔵書数を誇り、当然ながら英国文学・英国史を研究する者にとっては重要図書館である。加えて定期刊行物の専門図書館である大英図書館新聞図書館(British Library Newspaper Library)を、定期刊行物の収集場所の候補とした。

次に船舶関係および英国移民関係の図書資料および写真などの視覚資料を集めるために、ロンドンにある英国国立海事博物館付属の歴史写真および船舶計画部門(National Maritime Museum Historic Photographs and Ship Plans Section)、リヴァプールのマージーサイド海事博物館(Merseyside Maritime Museum)、ブリストルの英国帝国およびコモンウェルス博物館(British Empire and Commonwealth Museum)の3カ所が調査機関の候補として挙げられた。これらの機関は一般公開される博物館を所有すると同時に研究者への資料提供にも積極的であり、こちらの度重なる問い合わせに対して、いずれの機関からも非常に丁寧かつ迅速な返答をいただき、渡航前の円滑な準備が可能であった。

上記の候補研究機関のうち、同一都市に所在し、宿泊先を変更することなく訪問できるという利便性

を考慮して、最終的に英国ロンドンの二つの図書館(大英図書館、大英図書館分館新聞図書館)および博物館(英国国立海事博物館)を主たる調査研究先として選出した。ボードリアン図書館と比較した場合、大英図書館での複写代金が非常に高額だという難点もあったが、今回の主要目的だった定期刊行物の所蔵があったのが同図書館のみであったこと、助成金による援助があったため高額の複写費用を得ることが出来ることから問題とならなかった。さらに報告者が過去に同機関でリサーチ経験があったため利用方法に精通していたという三つの理由から最終的に調査先として選択した。エジンバラ大学付属図書館についてはロンドンから遠方ではあったが、本館にしか所蔵のない資料があったため調査機関から除外しなかった。

## 4. 調査の実際

前項目で選出された調査機関において調査をおこなった訳だが、ここではとりわけ文学研究に特有の資料収集の実際について説明する。

調査期間は約2週間であったが、実質的な調査時間は非常に限られていた。例えば英国国立海事博物館のように調査機関のなかには予約制をとり、一日の来館者の数が制限されていた機関があったことや、各調査機関の閉館日を考慮すると、実施的な調査時間は10日ほどであった。このように限られた調査期間での調査を有効かつ円滑に進めるために、複写による収集を中心に進めた。報告者が扱った資料はすべて貴重資料扱いと指定されていたため、セルフ・コピーは出来ず、単価の高い依頼複写(1枚あたり約100円~200円)とならざるを得なかった。残念ながら当該資料館はすべてカメラなどの撮影を禁止していたため、映像データとして保存することが出来なかった。そのため保存状態が悪く複写禁止に指定された資料については、パソコンに文字入力することとした。

上記のような手法で主に収集したのが、週刊誌『水夫』(The Seaman)からの資料である。国内における事前調査から、湾岸都市部の移民にまつわる暴動を調べていた報告者が調査対象としていたのが本誌であった。1909年に船舶関係者専門の週刊誌として創刊された本誌は、国際船員および全国水夫組合(The International Seafarers, and of the National Sailor's and Firemen's Union)から発刊(毎週金曜日発行)さ

れた。出版元からも推測出来るように、本誌は船員たちの組合誌である。発行地はロンドンではあるが、船舶関係者の専門誌である本誌には、英国内のみならず各国の湾港都市の事件などが詳細に掲載されていることに特徴がある。

移動する「異人種」に関して調査する報告者が『水夫』に着目したのは、湾港都市における暴動事件との関連から当時同じく論争が続いていた「黄色の危難(Yellow Peril)」と呼ばれるアジア人船員雇用問題に注目していたからである。『水夫』とは、その名のとおり水夫のための週刊誌であるが、当時の英国において水夫と呼ばれる労働者は、英国海軍に従事する海軍船員と商船などに従事する商船船員とに大別されるが、『水夫』の読者として想定されるのは前者ではなく主に後者であった。ただし、両者は決して無関係ではなかった。本誌の組合誌という性格上、商船従事者を対象とした情報を中心となっているが、例えば戦中に従軍した船員読者からの投書が継続的に掲載されているように、戦争という社会情勢のため海軍もしくは戦争情報についても豊富に報道された。さらに船舶ゆえの劣悪な労働条件のため、商船でも海軍でも慢性的に労働力不足という共通の、そして競合する問題を抱えていた。開戦とともに海軍に国内の人材が流れたために船船主らは、労働力の供給先をまずは救貧院から、さらに安価で良質な低賃金労働者を求めて「外国人」船員を迎え入れた。ここで問題となるのが、1660年制定の第二次航海条令の「英国船の乗組員は、その4分の3がイングランド人でなければならない」という条項である。この乗組員の国籍に関する制限については、戦争のたびに見直され、1709年法、1794年法、1823年法において緩和され、最終的に1849年に廃止されるに至る。その結果、外国人船員雇用は無制限となり、折しも戦後の失業率の増加によってここにアジア人船員問題すなわち「黄色の危難」が浮上したのであった。

1919年以降の『水夫』誌を調査した結果、以下の二点が明らかになった。一つは暴動事件および外国人船員問題を「黄色の危難」と題して大々的に、しかも継続的に誌面を割いて取り上げ、当時の本誌読者——船舶従事者、湾港労働者——にとって大きな関心の的であったことが明らかになったことである。本件は組合の年次大会において毎年のように議論され、水夫たちにとっては重要関心事であったことが

証明された。また同組合の創始者で、船員代表として国会にも選出される重要人物ハヴェロック・ウィルソン(Havelock Wilson)も演説においてアジア人船員問題を繰り返し喚起しているという重要な証言も確認された。

二点目の成果として今回の調査のなかでも性と人種から帝国の身体の話解を試みる報告者にとって、とくに『水夫』において重要と思われる資料が、1924年3月から6月にかけて、継続的に掲載された「白人の黒人化現象」についての記事の発見が挙げられる。イングランド北東部の湾港都市ハルの労役所(workhouse)からの報告として、同年3月28日に「黒人か白人か」と題して掲載された。ここには黒人化したという白人がロンドン大学キングス・カレッジを含め複数の医者に診察され、「治療」されたものの、彼の肌は黒いままだと記されている。本記事の分析については今後の論文の課題となるが、本記事が継続的に報道されていたこと、黒人化した当人の証言などは「異人種」間暴動の言説を考察する大きな手がかりとなることは間違いない。

## 5. 調査の成果

本調査の成果は三つあげられる。一点目は当初の計画のとおり、戦間期における「異人種」間の暴動事件に関わる船員たちの言説の詳細を、当時の船舶関係者専門誌の報道から確認できたことである。さらに二点目として、年代順に船舶専門誌を通読することによって、当時の言説に関する理解を深めることが出来た。三点目に人種の線引きに対する船員らの不安が如実に反映された白人の黒人化現象という記事を収集したことである。このような具体的な記事の発見は、本調査がなければ決して実現し得なかったことであり、大いに満足のいく成果を収めたといえる。

## 6. 今後の展望

本調査の目的であった湾港都市および船舶関係者間に流通される「異人種」言説の資料収集が達成され、非常に充実した調査であったといえる。しかし文学研究は資料収集で終わる訳ではない。これを分析し、理論的に構築することが必要である。今回の調査を足がかりに戦争と伝記という戦間期の英国という特定の時代、特定の空間だけの問題ではなく、現代にも続く問題でもあることを明らかにし、さら

なる理論構築を追求したい。その一歩として大戦間期の英国における人種と性に関する分析をジェンダー研究の学会誌へ投稿し、博士論文の完成を達成したいと考えている。

最後になるが、今回の調査研究にあたっては二人の友人から大きな協力を得たことを記しておかねばならない。ロンドン大学留学中の浮岳靖子氏には、

図書館の利用方法、さらには各調査先に便の良い宿泊先も紹介していただいた。文字通り彼女の助けなくしては、このように短期間の渡航調査で望み通りの成果は出なかったであろう、またエジンバラ大学講師のベンジャミン・ホワイト氏にはリヴァプールのマージーサイド博物館の知人をご紹介いただいた。両氏の助力と友情に心より感謝する。

まつなが のりこ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学  
matsunaga55noriko@yahoo.co.jp

---

### 指導教員のコメント

本海外調査研究は、(1)研究対象の確定化、(2)分析資料の入手、(3)方法論の錬磨という3点において、研究者の博士論文執筆に大きな貢献をした。

(1)研究対象の確定化については、本研究者は大戦間の英国伝記文学をテーマに博士論文を構築中であるが、その研究対象の一つとして、V・ウルフ『オーランド』における港湾都市での「異人種間」暴動をとりあげ、テキスト分析において一定の成果を収めていたが、テキスト外言説との照応関係については概括的言及に留まらざるをえなかった。本海外調査研究により、このトピックを博論のなかに有機的に組み込む方向性が得られた。(2)分析資料の入手については、着眼点の独創性も絡んで先行研究が少なく、また原資料の閲覧は英国に限られていたので、本支援の貢献は大きい。(3)方法論の錬磨については、文学研究をテキスト講読の外にひらき、本研究者のテーマである人種と性の複合的な抑圧構造を社会的な視野から分析していくには、歴史的資料の研究が必須である。本調査研究により、表象分析と歴史分析の両立の必要性を確認するとともに、それらを統合する理論的方法論へも研究の展開が図られることとなった。

(文教育学部 教授 竹村 和子)